

## A Dream Come True (AOA Travelling Fellow 印象記)

新潟県立瀬波病院リウマチセンター整形外科

遠山(高橋)知香子

この AOA Travelling Fellow の募集を初めて日整会雑誌で見たとき、留学先のボストンから帰ったばかりの先の見えない状態の中、またアメリカに行けるかもしれないと、わずかな望みを抱いたものでした。目的も定まらず、日々の生活に振りまわされ、毎年募集を見るたびに応募したいと思いつつも、発表できる仕事もなく、英語も堪能とはとても言えず、さらに、採用者は国立大の助教授や講師の方が多く、一勤務医がただアメリカに行きたいというだけでは、無謀な試みとしか言いようもなく諦めていました。しかし、だんだん 45 歳の年齢制限が近づき、長年の夢をただ眠らせておけず、思い切って応募しました。ですから、国際委員会から「採用おめでとう」の通知をいただいたときには、本当に思いがけず、天にも昇るとはこんな気持ちかと思うほどでした。

しかし、夢のような瞬間は一気に過ぎ、その後のツアー中の口演の準備は、私にとって容易なものではありませんでした。その上、思いもかけず、AAOS(アメリカ整形外科学会)にポスターが採用となり、さらに、いままでさんざん reject されていた英文論文が、1 度に 2 篇 revise との返事が来て、これも早急に対応せねばならず、何から手をつけたらよいのか、一時途方に暮れてしまったほどでした。それでも時はどんどん過ぎ、慌ててポスターとスライドを持って、AAOS の開催地であるニューオーリンズに向かいました。ニューオーリンズに到着してからは、時差をなかなか克服できず、よく眠れない日々が続く、体調のすぐれないままグループツアーへ突入しました。

第 1 訪問地ダラスは、黒坂先生の恩師であった Dr. Bucholz のいらっしゃる Southwestern Medical Center, the University of Texas を中心に、子ども病院である Scottish Rite や John F. Kennedy が狙撃されたとき運ばれた、Parkland Hospital などを訪問しました。Dr. Bucholz はご不在でしたが、代わって Dr.

Jones が、献身的に私たちを世話してくださいました。Southwestern には、リウマチの大御所 Dr. Lipsky もおられますが、整形部門とはあまり交流がないよう伺っています。その理由になるくらい、同じ建物内なのにオフィスの距離がすごく離れていて、さすが広大な土地を有するテキサスと足で実感しました。

次のセントルイスは、脊椎外科が専門の平泉先生が望んだだけあって、Washington 大学のレントゲンカンファレンスに参加した折は、超高度な scoliosis deformity などを三次元的に矯正した症例をたくさん提示され、まさに、Bridwell 教授が“maximum invasive operation”とおっしゃっているとおりでした。他の病院へも手術見学に伺いましたが、たまたま、人工膝関節で知られている Dr. Whiteside が、人工股関節の手術をしておられ、隣室のビデオルームですっとみることができました。

第 3 の訪問先ロチェスターの Mayo Clinic は、Mayo Building, Plummer Building など、いくつかの建物より構成され、すべて地下でつながっているため、雨に濡れず患者さんが移動できるという利点がありますが、迷路のようで、あちこちにインフォメーションデスクがあつて聞けるようになっていました。院内禁煙をはじめとする‘Mayo policy’なる独自の規則があり、lab の方々が、常時ネクタイを着用されているのには、少々驚きましたが、Mayo ツアーの専任ガイドがいるくらい、毎日世界からビジターが来るためとのことで納得しました。

次が、私の希望したボストンで、訪問は 3 回目でしたが、前回はいずれも秋、冬で、今回は 4 月初めでしたので、スイセンなどの花が咲き始め、私にとってはとても新鮮でした。やっと体調も回復し、歴史ある Harvard Club に宿泊した翌朝、私の留学先であった Brigham & Women's Hospital (BWH) を訪問しました。ちょうど水曜日で、私が以前いたときと同じよう



ボストン, Brigham & Women's Hospital のカンファレンスルームにて. 昼食の休憩時ホストの Dr. Thornhill, Dr. Herndon とともに.

に, 朝7時から grand round があって, Dr. Dick の “resection and allograft replacement for tumors of the proximal humerus” を聴講, research lab tour の後, われわれ fellow とボストンの先生方とのカンファレンスとなりました. 私がトップを切って, “infection after total hip arthroplasty for rheumatoid arthritis” を発表させていただきました. スライドの最初は, いつもどおり, 勤務先である瀬波病院の紹介で, 小規模ですが, 整形, 内科, リハビリ医が協力して RA 診療に当たっていることをアピールしました. 続いてホストの Dr. Thornhill が total knee について講演されましたが, 途中で突然けたたましくアラームが鳴り響き, 彼の講演中, 止まることはありませんでした. そして, 気づいたときには周りの部屋には誰も居らず, 一同慌てて避難するというハプニングもありました. 結局, 事無きを得てカンファレンスは再開され, Dr. Mankin の講演も含めてすべて終了し, 目的を果たした安堵感を覚えました(写真左). 夜には, Harvard Club 内のレストランで, Massachusetts General Hospital (MGH) の Dr. Rubash らとディナーをともし, この日のために持ってきた着物を着て, これで本当にすべて出し切ったという気分でした(写真右). BWH は Harvard Medical School (HMS) に隣接し, HMS の関連病院になっており, さらに, Beth Israel, Children's Hospital などとともに, medical circle を形成しています. 一方, MGH は, MIT (マサチューセッツ工科大学) とチャールズ川をはさんでその対岸に位置し, BWH と並ぶ大病院の1つです. 最近その二大病院が統合し, 新病院の整形外科チーフとしてピッツバーグから Dr. Hern-



ボストン, Harvard Club のレストランにて. ディナーの際 Dr. Rubash らとともに.

don が今年の1月に赴任されたばかりでした.

グループツアー最後のニューヨークでは, 整形外科専門の Hospital for Special Surgery (HSS) を訪問しました. セントラル・パークの東, イースト川のほとりに位置し, 手術室が2カ所に分かれていたり, オフィスもこぢんまりとしており, テキサスやセントルイスと違った, 人口密度の高さを物語っていました. 朝の症例検討会には, Dr. Weiland (来年の ORS の会長) の姿などもあり, 4月3日の手術予定表には, 人工膝, 股関節置換術がおのおの4例ほか, 約50の症例が並んでいました.

グループツアーはニューヨークで終了し, 私はそこで他の fellow の方々と別れ, 再びボストンを訪問しました. Hand surgeon の Dr. Feldon の計らいで, New England Baptist, St. Elizabeth Hosp. など見学させていただいたり, また, 再度 BWH を訪問し, グループツアーのときお世話になったお礼をしたり, そうした中に, 昔過ごした頃のいろいろな思い出が蘇り, 充分ボストン滞在を満喫しました. その後, 帰り道ということで, UCSF (University of California San Francisco) の Dr. Bradford にお願ひして, RA 外来を見学し, 実り多かつたすべての行程を予定どおりに終了し帰国しました.

全行程を終了して思うことは, fellowship を夢見たときと全く違うものでした. 5人の fellow が希望した5カ所の都市を, 2,3日間隔で移動するのは, 私にはこたえました. 医療のレベルに関しては, 差がないことを再確認し, ただ診療室などのスペースが広い, 秘書がいるなどシステムも含めた医者を取り巻く環境の違

いに、少々落胆しました。そしておのおのの訪問地のホストの違いに驚き、さらに行動を共にした fellow の方々との関わり合いを考え、結局つねに自分に関わる未知の人々とどのように接していけばよいのかを考え、毎日がその繰り返しでした。私ひとりが女性であるためにほかのドクターに迷惑をかけないように、できるだけ足手まといにならないようにと思っていました。手術場に入ったりするときの着替えなど、別々になるときは、とにかく遅れないよう努めました。また、予想していたとおり、各地で、「日本で、女の整形外科医は君だけか」というような質問をされ、日整会登録で約 500 名と国際委員会に伺った情報を説明して回りました。

夢は実現しましたが、それが今後どのように自分に返ってくるのか、今のところわかりません。ただ、たくさんの人たちと知り合い、その方々に支えていただいたことは決して忘れないと思います。グラスで Dr. Jones 宅に泊めていただいたこと、セントルイスでコンバーチブル・カーで病院とホテル間を送迎してもらったこと、ニューヨークでは、ホストのドクターが ganglion

や patella fracture の手術をしていてなんとなくほっとしたことなど、いろいろな思い出があって、挙げれば限りがありません。特に、われわれのリーダーで、ツアー中も毎日訪問先と連絡を取り、本職のツアー・コンダクター顔負けくらい、いろいろ手配して下さった黒坂先生にはお礼の申し上げようもありません。他の fellow の方々も、私が女であるということ(?)、つねに気を使っていたいただき大変感謝いたしております。また、国際委員会の国分先生をはじめスタッフの皆さん、推薦くださった新潟大の高橋教授、さらに、留守中私の仕事をカバーして下さった瀬波病院の先生方にお礼を申し上げます。そして、渡米前に突然 fax machine を購入し、何回もアメリカに連絡をくれた両親、AAOS に同行しポスターを貼ったりとつねに助けてくれた夫に、誌面を借りて感謝の意を表したいと思います。

夢の実現に万歳！ そして、ご助力くださった方々、本当にありがとうございました。

(1998 年 5 月 記)